

2012年1月28日

第8回 日中戦争史研究会

参加者（五十音順，敬称略）

王曉葵（愛知県立大学），菊池一隆（愛知学院大学），高明潔（愛知大学），仁欽（愛知大学），張鴻鵬（名城大学），布施潤（愛知大学），丸田孝志（広島大学），三好章（愛知大学），森久男（愛知大学），山口哲由（愛知大学）

記録作成：山口哲由

報告1：柴田哲雄（愛知学院大学）

「書評：堀井弘一郎著『汪兆銘政権と新国民運動—動員される民衆』」

#### 【報告要旨】

従来研究蓄積の乏しかった汪兆銘政権に関して、民衆に対する教化と動員工作に焦点を絞って記述された堀井弘一郎著『汪兆銘政権と新国民運動—動員される民衆—』を取り上げ、ここで記述された内容の意義と課題に関する書評の報告がおこなわれました。

#### 【質疑応答】（司会：馬場毅）

堀井：発表者による著書に対する指摘，(1) 汪兆銘政権による動員政策を国民がどのように受け止めたかを示す資料の不足，(2) 汪兆銘政権における国民運動以外の要素，軍部や資本家層に関する記述の不足，(3) 汪兆銘政権は太平洋戦争の可能性をどのように認識していたかの考察の不足，に関して答えたい。

第1の指摘は非常に重要であり，汪兆銘政権下の国民の受け止め方を検証する必要があるが，これまでの文献資料の調査ではそれを明確に示す資料はみつけない。そのために著書では，主に日本の新聞などで発表された記事に基づいて国民の動向を示すことになった。

第2の指摘に関して，今回の著書ではこれらを十分に記述できなかった。軍部に関しては，当時の資料では，形式的に100万人ぐらいの軍を擁していたとされるが，全て政権が組織した軍隊という訳ではなく，蔣石軍などから投降兵などもかなり含まれていたと考えられる。そういった部分の実数や，本当に投降兵であったか否かに関しては十分に把握できていない。上海資本家層との結びつきに関しても十分には把握できていない。

第3の指摘に関しては『周仏海日記』における記述に依拠し，汪兆銘政権が太平洋戦争開戦の兆候を掴んでいたとみなした。しかしながら，これ以外の文献における検証はまだ進められていない。周仏海と汪兆銘との関係も状況に応じて変化しており，その点を踏まえて検証する必要がある。

柴田：第 3 の指摘に関して、私の著書では上智大学の高橋久志先生の論文を引用して、汪兆銘政権にとって日米開戦が青天の霹靂であったと考えたが、そういった論文と対比してもう少し考察が欲しかった。

菊池：堀井氏著書と柴田氏著書は同じく汪兆銘政権を扱っており、堀井氏は新国民運動を、柴田氏は東亜連盟運動を主に扱っているが、堀井氏が著書を出版するにあたって柴田氏の著書とは異なる主張は何だったのかを教えて欲しい。

堀井氏の著書のなかでは、汪兆銘政権における新国民運動の意義として、中国における近代国民国家形成に影響を与えたと述べているが、その論証が不十分ではないか？

また、新国民運動における民衆動員は、主に青年や公務員に対する幹部養成などがおこなわれたと記述されているが、それらの人びとに対する働きかけをもって民衆動員や国民運動を論じていいのか疑問が残る。

汪兆銘政権を対日協力政権とする考え方に関しても、軍・外交・財政の独立性の論証が不確実である。新国民運動に関する政策を論じる場合であっても、まずは政権の自立性を検証する必要がある。

堀井：私の著書と柴田氏の著書との違いとしては、特に新国民運動を取り上げ、それが中国での近代国民国家に形成に与えた影響を考察しようとした点である。ただし、それ自体は未だ仮説的に提示に過ぎず、著書で示したようないくつもの状況証拠から類推すれば、中国における近代国民国家形成への道筋がみえると私は考えている。

三好：この夏に蘇州の政協委員会などを訪問して文献資料調査をおこなったが、そこでは、当時の政権と商会がかなり深く関わっていたことを示す資料などがみつかった。例えば、物資の買い付けなどに関する政府と商会との交渉の記録などが残されていた。実際には、政権が地域の資本家ブルジョワジーなどが協力していたのは事実であると考えられ、そういった関連資料を読み込んでいくことで、汪兆銘政権に対する資本家層の位置付けも明確になっていくのではないだろうか？

また、著書では民衆という言葉を使っているが、これは定義の難しい非常に曖昧なものである。動員の状況を示すにしても、具体的にその対象となった人びとの属性と人数を明らかにしていく必要がある。

動員される側の世論としては、『中華日報』などには国際情勢などをどのようにみているのか、どういった記事取り上げていたのか、という観点から考察することもできるのではないだろうか。これだけに依拠するのは危険だが、文芸欄などにも民衆の考え方もみることができる記事もあるのではないだろうか？

汪兆銘政権を傀儡政権とみなすのか、対日協力政権と呼ぶのかに関しては、私自身は、汪兆銘政権も完全な言いなりではなく、自立的な意志を持って政府や国民国家を作ろうと

していた部分は見受けられるので、対日協力政権で良いのではないかと思う。

菊池：汪兆銘政権を傀儡政権とみなすのか対日協力政権とみなすのかに関して、政権の自立性を認めていないわけではないが、言葉の問題ではなく実情としてどうなっているのかを把握する必要がある。私自身としては、対日協力政権という呼び方に関して実情を表していないと感じている。

丸田：民衆の動員だけをもって近代国民国家を論ずることはできない。当時の日本を参考としたのであれば、政権の根拠となる憲政の話をする必要がある。その点に関して少し説明して欲しい。

また、大衆運動のなかでは記念日が定められ、セレモニーなどをおこなっていた場合が多かった。重慶政府などは農歴を基準として農民の日などを定めていたが、新国民運動のなかでもそういったものはみられなかったのか？

これは感想として、私は以前に1940年代の華北における民衆の世論や政権に対する反応を詳しく調べた。その際に、二次資料としての当時の政治状況に対する回想録などがいくつかみつかった。そういったものを利用していけば、国民運動に対する世論や評価なども記述していけるのではないだろうか？

堀井：憲法に関しては、汪兆銘政権も憲政実施委員会を組織し、憲法をつくる意図はあったと考えている。しかしながら、その実態はほとんど機能していなかったようである。ただし、そういった部分に関する委員会の議論を詳細に検証した訳ではない。少なくとも憲政を目指したということは事実のようである。

記念日などに関しては、ほとんど把握できていない。

世論に関しては、汪兆銘政権の機関誌とされる『中華日報』などを参考としたが、そこには当時の世論を押し量るようなもの、例えば、対日批判などはほとんどみられなかった。一方で、日本の新聞のなかには汪兆銘政権の対日協力的な姿勢を批判する記事などもあったのでそれを参考とした。

菊池：汪兆銘政権が憲政に言及したのはいつ頃だったのか？

堀井：憲政実施委員会が組織されたのは政権の初めのころ、1941年の秋ごろである。

三好：日本の対米参戦はすでに上海などでは噂されていたことであり、43年以降、いくら報道規制をしてもそういった世論は押さえることはできず、政権が瓦解していくのは自然の流れであったと思う。汪兆銘政権下にある人びともそういった世論を鋭敏に感じ取っていたのではないかと思う。

報告2：森久男（愛知大学）

「関東軍とチャハル作戦」

【報告要旨】

本報告では、チャハル省（現在の内モンゴル）を中心としておこなわれたチャハル作戦をめぐる関東軍と蒋介石、蒙疆自治政府の動向に基づいて、当時の華北の状況推移を考察した発表がおこなわれました。

【質疑応答】（司会：馬場）

高：蒙疆政権におけるチャハル省南部の位置付けはどのようなものであったのか？

森：チャハル省南部には鉄道が通っており、関東軍が最も重視したのが南部地域であった。蒙古聯盟自治政府が出来たとき、首都は帰綏であったが、1940年に蒙古聯合自治政府ができた際に首都は張家口へと移った。関東軍は当初、察北政権と察南政権を一体化してチャハル政権を作ろうとした。その後、これに山西省北部と綏遠省を加えて蒙疆という概念が作られていった。察北よりも察南が重視された理由は農耕地帯だからである。察北には広大な土地があるもの、半農半牧地帯であり、経済力は低い。一方で、張家口は政治的にも経済的にも重要であり、ここを押さえることによって鉄道を通じて周辺都市を押さえることができた。

丸田：レジュメのなかで、蒋介石が日本の行動様式を深く理解して、と述べられているが、もう少し説明して欲しい。

森：蒋介石は新潟で日本式の軍事教育を受けている。国民党の幹部のなかには日本に留学していた人材が多く、軍人の中にも知日派が多い。中国で出版された作戦評価のなかには、共産党によるものはイデオロギーに基づく批判が多い一方で、旧国民党の人びとによって出版された書籍では、作戦の内容に関して冷静に評価したものが多かった。こういう点からみても客観的な評価ができていたのではないだろうか？時間をもって空間に換える、という作戦に関しても、日本軍の性行を良く理解していたのではないだろうか？

丸田：第二次国共合作の時点で共産党軍はほぼ壊滅状態に近かったと思うが、蒋介石にとっての中共軍の位置付けをどのように考えていたのか？

森：蒋介石は共産党勢力の拡大に警戒していたが、国民党側の抗日組織などにも勢力を拡大していったというのが大きな誤算だったのではないだろうか。蒋介石が反共という考え

方をもって根拠地を攻撃したという考え方も持たれているが、むしろ防衛という意義が強かったのではないだろうか？

三好：蔣介石が高田で軍事訓練を受けたとのことであったが、その間の実戦経験に関してはシベリア出兵くらいしかない。日本軍の最大の問題点は兵站にあるということは理解していたと思うが、国民党軍はそういった弱点をどのように突いてきたのか？

森：日本軍の兵站は問題点を多く抱えていたが、国民党軍よりは勝っていた。蔣介石の当初の考え方としては、山西省とチャハルで抵抗することができれば、日本軍の攻勢を食い止めることができるのではないかと考えていた。そのために蔣介石は、上海に国民党の精鋭部隊を投入してしまったが、そこには日本軍の戦闘後の予備役などによる回復能力の誤算があり、日本軍は華北での損害をある程度回復していた。上海での国民党軍は、蔣介石のもくろみを外れ、側面を突かれて潰走してしまい、以降、南京まではほぼ無抵抗の状態を作ってしまった。

三好：日本軍と国民党軍との差としては、動員能力の差となってくると思うが、国民党における徴兵制度などはどのようになっていたのか？

森：国民党でも後に徴兵制度などをおこなったがシステムティックなものではなかった。日本軍に関しては、一度、敗戦したとしても敗残兵を再編する仕組みがあったが、国民党軍には敗戦でばらばらになると、再組織をする仕組みがなかった。敗残兵に再組織するには強制的に徴集するか、あるいは金銭でもって集めるしかなかった。そのために、軍隊教育に関しても非効率的であり、十分に教育を施された人員が少なかったとされる。ただし、蔣介石も国民党軍の能力の低さを理解していたと考えられる。

三好：国民国家を造る際に、人員、特に兵員の動員能力がその正否に関連してくると思うが、中国の場合はそれが十分に機能していなかったが、なぜ上手くいかなかったのか？という部分が疑問に残る。一方で、日本はそういうシステムを十分に作っていたが、上手くいかなかった。そういう点では、蔣介石は国民党軍が有する問題点も含めた上で長期的な勝利を考えていたことが伺える。そこでやはり気になるのが、蔣介石が受けていたとされる軍事訓練の中身であり、その時の身分であろう。

森：そのことに関しては、私も良く解らなかった。南京当案館にあった資料に基づいて蔣介石の年譜が出版されているので、それを読み返せば解るかも知れない。

菊池：蔣介石は日本軍の行動様式を理解していなかったのではないだろうか、と私は考え

ている。また、資料に関して、董頭光『蔣介石』と『蔣介石秘録』は慎重に使う必要がある。華北において華北義勇軍や察綏抗日同盟軍などの残党も生き残っていたので、日本と国民党軍のだけの戦いが帰趨を決めていたわけではない。また、中国において国民国家のもとでの動員体制ができていたわけではなく、様々な勢力が抗日という考えの下で戦っていたと言える。そう考えると、やはり、日本と国民党軍だけをもって日中戦争の全体像を理解できないのではないだろうか？

森：蔣介石の日本軍に対する理解としては、その訓練の現場を知っていたという利点があったのではないだろうか？いろいろな勢力があったということは事実であろうが、中心的な役割を果たしたのは国民党軍であったと考えている。さらにその周囲に軍閥勢力などがあったと理解している。私は、戦争全体の帰趨を定めた要素に関して議論することを目的としている。また、資料の問題に関しては私も同感であり、そういった一般的に引用される資料に加えてさらに詳細を考えることができる資料を探していく必要があると考えている。

菊池：綏遠事件の際に蔣介石が徳王を敵視していなかったとされる資料的な根拠は？

森：当時の関係者による回顧録から総合的に判断するとそう読める。直接的にそれを検証できる資料はない。新中国成立後も徳王は処罰されていない。

馬場：チャハル作戦以後に日本軍が山西省に入るが、これは引き込まれたということではなく、この際に華北五省の分離の意図を持っていたのではないだろうか？

森：関東軍と日本軍の意図を分けて考える必要がある。関東軍は華北五省に対する明確な意図を持っていたが、日本軍全体には明確な方針なかった。そのように様々な意見があるなかで、なし崩し的に山西作戦の方向に引き込まれたと言えるのではないだろうか？

堀井：当時の国際情勢のなかで蔣介石の勝利へのプランはどのようなものであったのか？

森：大まかに言うと、時間をもって空間に換えるという基本方針の下で引き延ばしながら、日米開戦においてその勝利を確信したと考えられる。